

智顗と灌頂における『涅槃經』解釈の比較について

——即義に見られる『涅槃經』経題の解釈——

則 慧

1. 問題の所在

智顗(538-597)と灌頂(561-632)における涅槃思想の相違点については、先学の研究によれば『涅槃經』は『法華經』と同時同味とされながらも、実質的には『法華經』の後番という位置に据えられ、『法華經』の下位に置かれることになったということが指摘されている¹⁾。そのことに基づき、筆者は本論文に先立ち、智顗『法華玄義』と灌頂『大般涅槃經玄義』における涅槃思想の検討を行い、灌頂は智顗の『法華經』を至上の經典とする見方と異なるという結論を発表した²⁾。それに続いて、本論では智顗の天台教学で即義がどのような位置にあり、それを土台として天台の教義がいかに判釈されているかを論じる。それから、即義を中心として智顗『法華玄義』と灌頂『大般涅槃經玄義』の中で、『涅槃經』の経題についての解釈を検討することにより、彼らの涅槃經觀の相違点を考察してみよう。

2. 智顗教学における即義

即義の思想に関しては、天台化法四教(藏・通・別・円)の中でどのような位置に据えられるかについて、智顗の『摩訶止観』には円頓止観の相を解釈する折に、即義を通じて相違の概念を統一しており、次のようにいう。

円頓止観の相は、…觀ずれば三にして即ち一、発けば一にして即ち三にして不可思議なり。権にあらざるにあらざる。優にあらざるにあらざる。前にあらざる後にあらざる。並ぶにあらざるにあらざる。大にあらざる小にあらざる。(T46, 25b)

智顗は円頓止観の解説において、その「即」は三と一、一と三とを互いに相即円融しているという。それによって、権と実、優と劣などの対立のあり方を消除することができ、それは円教の不可思議の觀法である。それ故に即義は円教の中

核的な教えとしてある。例えば智顗の『法華玄義』では、「涅槃即ち生死なるは苦諦の清浄なり。菩提即ち煩惱なるは集諦の清浄なり。…此れは円教の中の修多羅なり」(T33, 812b)とあるように、それは即義によって二元対立の諸法を円融し統合しているが、それを円教の特徴的なものとして論じている。従って、天台教学では円教を天台学の根幹としており、それを支える思想が即義である³⁾。それ故、智顗以後の湛然や知礼などの天台諸師は、その即義が天台円教独自のものに属することを強調したのである⁴⁾。

3. 智顗と灌頂における『涅槃經』経題の解釈

3.1. 智顗の『涅槃經』経題の解釈

智顗がその教学体系においてどのような涅槃經観を持っているのかについて見てみると、彼の『法華玄義』で涅槃の種類について以下のように述べている。

類通三涅槃とは、地人の言わく、「但だ清浄・方便浄有るのみ、実相を名づけて清浄涅槃と為し、因を修して成ずる所を方便浄涅槃と為す」と。今、理性を以て性浄涅槃と為し、因を修して成ずる所を円浄涅槃と為す。此れは即ち義の便なり。薪尽き火滅するを、方便浄涅槃と為す。此れは文の便なり。(T33, 745b)

智顗は理性の体を性浄涅槃、因を修して円満に達するような次第を円浄涅槃、一期生命の歿を方便涅槃とするという性浄・円浄・方便の三種涅槃を打ち出した。これを見れば、智顗は各別的な解釈によってみており、円教の即義に従わないだろう。また智顗は三種涅槃を『涅槃經』の経題に配当して解釈し、

大經の題に大般涅槃と称するは、翻じて大滅度と為す。大とは其の性広博にし、即ち性浄に拠る。度とは彼岸に到り、智慧満足す。即ち円浄に拠る。滅とは煩惱永く尽き、断徳成就す。即ち方便浄に拠る。此の三涅槃は即ち是れ三軌なり。(T33, 745c)

智顗は「大般涅槃」を「大滅度」と翻訳しており、「大」は「性浄」を、「滅」は「方便浄」を、「度」は「円浄」を示すというものであり、「大滅度」に対応して性浄・方便浄・円浄を各々に相当すると明らかにしている。その解釈を見ると、「大滅度」のうちの一つごとに、他の二つの義を包摂し融合していないので、そのような視点は円教の即義ではないだろう。先述したように、即義は円教の教えのみに限ることにより、『涅槃經』の経題を解釈した智顗は、円教の究極的即義によって「大滅度」の解釈を行っていないので、彼の涅槃經観には『涅槃經』

の思想を純円独妙の最高位には置いていないことが推測される。

3.2. 灌頂の『涅槃經』経題の解釈

灌頂の『大般涅槃經玄義』では『涅槃經』の経題について次のようにいう。

此の經、若しは具に梵本に依らば、応に摩訶般涅槃那修多羅と云うべし。摩訶とは大をいい、般涅槃那とはここに滅度と翻ず。…第二に通釈せば、大とは大法身・大般若・大解脱を謂うなり。滅とは即ち是れ三徳、皆寂滅なり。度とは即ち是れ三徳、皆究竟円満するなり。故に通じて三字を以て名を標するは、三徳皆大寂滅究竟なるを表するなり。(T38, 1b)

灌頂の解釈によれば、注意すべきものは、通釈の中で「大滅度」を三徳と別に配当し、「大」の三徳が大、「滅」の三徳が寂滅、「度」の三徳が円満、という解釈を行っており、それに基づいて「大滅度」は、いずれも三徳を含めているから、それらの間に「相即」の思想が見られ、即義の教えが根底にあると思われる。また灌頂は『涅槃經』の経題をめぐる諸先学の見方を批判したが、彼自身は見解を打ち出した⁵⁾。彼は「大滅度」の一つ一つが次のようにいう。

一の大の字に於いて三法具足し、不縦不横、不可思議なるを秘密藏と名づく。秘密藏とは即ち大涅槃なり。…一の滅の字に於いて三脱具足し、不縦不横、不可思議なり。故に三点と名づく。三点とは即ち大涅槃なり。…一の度の字に於いて三智を具足し、不縦不横、不可思議なり。故に面上の三目と名づく。三目とは即ち大涅槃なり。(T38, 3a)

灌頂は「大滅度」の各々の義を詳しく解釈し、「大滅度」のそれぞれは「大涅槃」の義を全て具足し、そのような「不可思議」の円満を示している。その中には「大」を「不可思議」と「三法具足」、「滅」を「不可思議」と「三脱具足」、「度」を「不可思議」と「三智具足」の三つのセットで解釈していることが注目されるのである。つまり「大」のみは「三」の法を具足することができるから、「一具三」或いは「一即三」の公式が示されている。文中の「不可思議」と「具足」の語義は天台化法四教の中で、円教のみにしか使わないことがよく知られる⁶⁾。これに見ると、灌頂は円教の立場によって『涅槃經』の経題を解釈していることがわかる。それに続いて「三法」「三脱」「三智」については次のようにいう。

三法は即ち三智、三智は即ち三点、三法は即ち九法、九法は即ち三法なり。…一智三智、三智一智、一面の三目と名づくる所以なり。涅槃も亦たしかり。一脱三脱、三脱一脱、伊

字の三点と名づくる所以なり。涅槃も亦たしかり。(T38, 3b)

ここに見られる彼の「大減度」の論じ方を見ると、円教の即義を土台として、「三法・三智・三脱・三点・九法」のように融合し相即させていることにより、天台円教における最も究極的な教理を明らかにした。灌頂が『涅槃經』を円教に位置づけるのは、この点に見出される。言い換えれば、灌頂は『涅槃經』を至上の經典に位置づけた、という意図と推測されるのである。

4. おわりに

『涅槃經』の経題の解釈を見れば、灌頂が智顗の見方と相違する見解をしているところが見られるが、両師は「大減度」を解釈するときに、灌頂は円教の即義を通じて解明しているが、智顗は分析的、各別の見方によって解釈していることがわかる。そうすると、智顗の場合には『法華經』のみが純円独妙なる円教と呼ばれ、別の經典はそうのように円教と呼ぶことは出来ないものであるが、その純円独妙は円教の即義によって展開されているものである。それゆえに智顗の經典観は、『法華經』を至上の經典とし、『涅槃經』を『法華經』の下位に置いており、法華円教思想を最上の教えとしている。しかしながら、灌頂は純円独妙における即義をもって『涅槃經』の経題を解釈していることを見ると、『涅槃經』を最円満の至上の經典として見ており、これは灌頂独自の涅槃經観といえるであろう。

-
- 1) 藤井 (2013, 112). 2) 則 (2018, 69-83). 3) 宮沢 (1992, 77). また柏倉 (2008, 102) は、智顗における別教は「不即」「不融」なのであることを指摘した。 4) 宮沢 (1992, 79). 5) 大野 (1974, 345-347). 6) 柏倉 (2003, 26-28).

〈参考文献〉

大野栄人1974「章安灌頂における「大般涅槃」釈考」『印仏研』23(1): 344-347. 柏倉明裕2003「天台教学における即義」『印仏研』52(1): 26-28. 柏倉明裕2008「天台大師における別教」『天台学报』50: 102-107. 藤井教公2013「天台智顗と大乘『涅槃經』」『叡山学院研究紀要』35: 108-126. 宮沢勘次1992「天台大師の「即」について」『印仏研』41(1): 77-79. 則慧2018「智顗と灌頂における『大般涅槃經』解釈の相違点について——『法華玄義』と『大般涅槃經玄義』をめぐって——」『仙石山仏教学論集』10: 69-83.

〈キーワード〉 智顗, 灌頂, 即義, 円教, 涅槃經観

(国際仏教学大学院大学)